

「マイケルの国で勉強したこと」

藤田結子

(『児童心理』71(3) 小学校時代の勉強の思い出 2017 草稿)

私は小学校高学年のとき、親の仕事の都合で、米国東部メリーランド州にある公立小学校に約1年間通いました。英語漬けの日々を過ごしても、英語を話せるようになりませんでした。が、人生の転機となる勉強をしたのです。

渡米前、東京で商店街に近い公立小学校に通っていました。友だちの大半は金物屋、畳屋、食器店、蕎麦屋など自営業の家庭の子供で、中学生になると不良と呼ばれるようになった仲良しもいました。私は学童保育に通ったり、友達と公園で暗くなるまで遊んだり、児童館にある漫画本を読破したりと、勉強とは縁遠い毎日を過ごしていました。塾も英語教室も一度も通ったことはありません。

そんな日々から一転、米国での暮らしが始まりました。1980年代前半でした。親から「アメリカに行く」と言われてイメージしたのは、テレビなどで見かける白人の人たちだったことを覚えています。しかし実際に通ったのは、黒人の児童が多い公立小学校で、白人はマイノリティでした。ヒスパニック系や中国系の児童もいました。私が住んでいたのは白人以外の家庭が多い地区だったので、毎日スクールバスで黒人の子供たちと登下校をしました。黄色いバスの車内は、歌を歌ったり、物を投げ合ったりと大騒ぎ。仲良くなった黒人の女の子たちはすごくしっかりしていて、英語が話せない私に親切にしてくれました。日本で通っていた小学校ではすでにいじめもあり転校生はターゲットになりやすかったのですが、この学校ではそのようなことは起こりませんでした。

私は英語がわからないので、図画工作の授業以外でも、得意だった似顔絵や漫画を画用紙に描いて過ごしていました。当時アメリカでは、マイケル・ジャクソンの「スリラー」が大流行していて、子供たちにも大人気でした。私が写真を見ながらマイケルの似顔絵を描くとみんな大喜び。絵が上手いね、と同級生も先生もよく褒めてくれました。音楽の授業では、黒人の男の子たちが即興でラップやダンスを披露する日もあり、とても自由な雰囲気では児童が楽しんでいました。

児童の仲良しグループは、白人、黒人、その他というように「肌の色」でだいたい分かれていました。クラスの中心的な黒人男子のグループに、活発なタイプの白人の男の子が一人だけ入っていたりもしたので、児童の友人関係は人種、性、文化的背景と個人の性格が複雑に絡み合っていたように思います。担任の黒人男性の先生が、しっかり者の白人の子を私のお世話係に任命したので、私はクラスに三人だけいた白人の女の子たちのグループとよく遊びました。

また、同じバスで登校していた黒人の女の子たちとも仲良くしていました。英語がよくわからなくても、相手の気持ちはなんとなく理解でき、あとはノンバーバルコミュニケーションでなんとかなりました。

昼休みはグループで固まらず、あらゆる人種の子供がテーブルを囲んでランチを食べ、一緒に校庭を駆け回りました。今では懐かしい思い出ですが、異文化の中での学校生活に疲れ、校庭の隅に一人で隠れていた日や、学校に行きたくない日もありました。クリスマスの聖歌やバレンタインのカード交換など季節のイベントも経験し、あっという間に日本に帰国する時期になりました。最後の登校日、下校のスクールバスの中、泣きながら黒人の女の子たちと抱き合いました。いつか「またアメリカに戻ってこよう」と心に誓いました。

結局、国語も算数も勉強しないうえ、英語も話せるようにはなりません。しかし自分の人種が相対化され、その体験自体が大きな勉強となりました。なぜ黒人の子と白人の子は違うグループなのだろう、私自身はどの人種のグループに属するのだろう、なぜ黒人の子と白人の子は住む地域が違うのだろう、といろいろ考えました。これがマイノリティの文化や人種・民族問題に関心を抱ききっかけとなりました。後に米国・英国の大学院に留学し、研究者になりました。いつか留学しようと、英語は自分でこつこつ勉強しました。

私は幸運にも小学校時代に米国で暮らす機会を得て、現地の人種関係の複雑さを肌で感じました。小学生のうち、外に出て自然や多様な人々の生活に触れ体験し、生涯続く勉強への動機づけと知的好奇心を育むことが大切だと思うのです。